令和５年度　学校評価書

令和６年３月１日

福生市教育委員会　殿

福生市立福生第二小学校

校長　　湊　　仁　公印

１　今年度の学校の重点的な取り組みと総括

Ⅰ　重点「よく考える子」（深い学び）の育成
学習指導要領の確実な実施とカリキュラム・マネジメントの推進

(1)学習指導要領に基づく学力 の浸透 、「よく考える子」(深い学び)の育成
カリキュラム・マネジメント、タブレット等のICTの積極的活用、国・都・市学力調 査データ等を活用し、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得や特続可能な社会の創り手としての資質・能力を伸ばす。

①個別最適な学び/学習習慣の確立
・重点的な指導、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定による指導の個別化の推進
・学習活動や学習課題の機会を提供、自ら学習を調整できるよう学習の個性化の推進

②協働的な学び・「主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の創造本校の特色を生かした地協働学習の展開（地域人材、教材等の活用）

③国際理解や言語環境、ALT を効果的な活用 した外国語・外国語活動教 育の推進

④読書量や二小の百冊の設定、読み聞かせ、図書館司書等の活用による読書教育の推進

〈総括〉
①「個別最適な学び」では、個別支援・個別対応については、細やかに対応した指導を心がけていた。しかし、最適な学びとしての個の実態に応じた対応については具体化が十分とは言えない。
研究主題の内容にも関わるのでこれからも継続的に学校全体の課題として取り組んでいきたい。
②「協働的な学び」におけるグループ学習や個の考えや意見を共有するなど学習用iPadを積極的に活用する面は、授業や学習活動の中で数多く見られた。それが深い学びに繋がったかどうかは、さらに検証し、効果的な授業の進め方を工夫していかなくてはならない。
③外国語教育では、ALTを積極活用し、英語ウィーク・東京グローバルゲートウエイなどネイティブな英語に親しみ、意欲へつながる展開が見られた。また、デジタル教科書を活用し、個別の学習や進度に合わせて、ネイティブの音声に触れながら、楽しみながら学ぶスタイルも定着してきた。
④今年も充実した活動となったのは、読書週間等の取組である。縦割り班での、５年生による読み聞かせや親子読書による保護者の方の読み聞かせは、どの場面でも集中して聴いて物語を楽しんでいた。目標の設定や二小の100冊については、取り組み方、紹介の仕方など、検討していくことが必要である。

(2)　「体を大切に する子」（心身健康力)の育成

①2020レガシー校の精神を継承し、スポーツへの関心・障害者理解の向上

②体力調査結果に基づいた「体力向上推進計画」の作成と体育授業の質的改善推進

③専門機関と連携し、食育、がん教育、薬物乱用防止等の健康教育の推進

①体力向上のために、日頃から休み時間などに外で遊ぶことを奨励した。また、４年を中心に福祉体験として、目の不自由な方、車椅子を利用の障害者の方に来ていただき、ご自身の体験などを通して障害に関わる話をするなど、児童の障害者理解に繋がった。
②体力調査の結果から持久力等の体力に課題があると考え、持久走週間や長縄と短縄を組み合わせ

た「縄跳び旬間」を設定し、全校で体力向上に取り組む機会を多くした。また、体育の授業実践を互いに参加し合い、授業力向上を図り、体力向上の傾向が見られるようになった。その一方で、テレビゲームや動画サイト視聴など、生活時間で占める割が増える傾向である。今後、目の健康や姿勢など健康教育への取組も重要となってきている。

③１年・６年では、食育のために栄養士による授業に取り組んだ。バランスよく食事をすることの大切さなどを学んだ。一方、給食では残菜が多く好き嫌いなど課題がある。その他、薬物乱用防止教室では薬剤師(校医)の先生による授業を行っていただき、知識・理解の促進を図ることができた。

(3) インクルーシブ教育のより 一層の推進 特別支援教育の充実と展開

①特別支援学級「くまがわ学級」及び特別 支援教室「かわせみ教室」の細やかな指導

②支援や専門性向上:特別支援教育校内委員会の機能の充実

③実態に応じた読み書きアセスメントやSSTの促進、SCやSSW、巡回心理士、関係 機関との連携、細やかな支援体制の充実

①支援学級の教員が、羽村特別支援学校や都立青峰学園へ研修に行き進学や就労に向けた子どもの将来を見据えた研修会に参加した。支援教室の教員は、専門性の向上のための研修会参加やＯＪＴを行い、特別支援教育の充実に繋げている。

②特別支援教育校内委員会では、児童理解や支援教室に繋げるための検討や支援の在り方について時間を掛け取り組んできた。また、校内研修機会を増やし専門性を高めたり、毎週木曜日には夕会で、問題・課題を有する児童や事案を全教員で共有したりすることができた。

③子ども達の実態把握や児童理解では、担任だけでなく、SCやSSW、巡回心理士など、多くの機会を作り少しでも支援が必要な子へのサポート体制の充実を図っていった。保護者・関係機関との連携も図り、支援体制が着実によくなってきている。

Ⅱ 人権尊重教育推進校の成果の継承、生徒指導提要に基づく教育活動の充実

①自他を大切にし、相手を思いやる人権教育の推進（挨拶・言葉遣い等）

②「道徳科校内研修ノート」活用等よる道徳科教育の充実

③気持ちの良い生活習慣の確立（ふっさっ子スタンダード+二小「きりっと生活」）

④豊かな人間関係を育むための多様な関わりや異年齢、異校種との交流活動の充実 ・縦割り班活動・美学年交流による主体性の伸長、リーダー性や力的態度の育成・幼保小中連携:スタートカリキュラムの充実、交流活動や教育活動の継承や連携

中校区の9年間のスムーズな系統・接続を目指した小中連携の活性化

⑤安心・安全の保障と居場所づくりや絆づくりによる情頼関係の構築、児童理解の充実 ・いじめ・不登校0を目指す指導・支援 未然防止・早期解決や関係機関との連携・不登校(傾向)児童と学校のつながりを大切にする細やかな対応・安全教育プログラムの活用 (防災教育・防災教育・安全教育・SNSルール等

①挨拶運動を継続し、中学校区（一中、二小・三小）では、中学生代表が母校に来て、児童と一緒に朝の挨拶運動に参加するなど交流による活性化を図ることができた。

②道徳研修ノートを活用したＯＪＴにより指導方法の充実を図ることができた。また、道徳授業地区公開講座では、保護者・地域の方々に対し、校長による解説を交えた授業実践を行い、今の道徳科の授業の在り方や目指すものについて体験していただくことができた。

③市の「スタンダード」に基づき、気持ちの良い生活習慣の具体的な目安、指針が確認され、学校でも家庭でも同じ姿勢で子どもに関われる習慣が定着してきている。一方、SNS等の利用については、生活習慣が安定しない要因にもなり得るため、今後も関連した対策が家庭の協力を得ながら進めなくてはならない。

④交流学習が活発に行われた。幼保小のスタートカリキュラム・一中学校区の三校交流会など、具体的な９年間の系統性を見据えた取り組みが行われ、幼保小や小中の教育環境・内容のスムーズな移行が図れるようになってきた。

⑤いじめ、不登校については、トラブルや傾向が出た時に速やかに組織的に対応ができてきた。教員一人で抱え込まず、学年、生活指導部、養護、管理職といった組織的な相談体制が機能していた。速やかに解決に向かう案件も多くあった。

Ⅲ　組織力向上、保護 者・地域との連携・協力、CS指定校としての運用の活性化

(1) 学校組織運営力を高め、チーム力を発揮し、活発な教育活動を展開

①チームによる話し合い、連携・協働による教育活動の充実

② 教員の主体的な学び合い高め合いによる専門性向上:(研修会・OJT・校内研究等)

(2)働き方改革の推進

①心身ともに健康で、働く意欲につながる雰囲気づくり

②法令に基づく労働状況の改善、勤務時間の把握、業務の効率化の推進

③労働環境整備、業務内容・行事等の精選・見直しの実行

(3) 保護者・地域との協働的な教育活動の積極的活用や充実

①150周年の節目の意義等を共有、教育活動情報発言と家庭との連携・協働

②CS及び「二小くまっ子応援団」との地域協働による教育活動の充実

〈総括〉

（1）

①経営会議（管理職・主幹教諭・指導教諭）を中心とした分掌組織による十分な話し合いに基づく企画・提案・推進を図ることができ、円滑な運営が増えた。

②教員同士の学び合いが、活発に行われた。OJTでは、アレルギー研修・プール施設の正しい使い方・効果的なICT活用・安全教育・道徳研修ノートを活用した効果的な授業展開・教員による模擬形式の学級会・国語科の効果的な指導方法など、校内の７割の教員がリーダー・推進役をつとめ、互いの資質向上に貢献することができた。

（2）①②③

トラブル対応・危機管理意識の向上・未然防止、早期解決など迅速かつ組織的な対応を図ることができた。効率的な時間運用にも繋がり、退勤時間が徐々に早くなる教員が増えてきた。

（3）

①１５０周年を来年度に控えていることを周知し、周年実行委員会を立ちあげ、令和６年度への準備・組織体制ができてきた。また、ホームページでは、家庭への情報発信手段として、積極的に活用を図った。動画サイトや学びの学習サイトへのリンク、必要情報の発信など、丁寧にできた。しかし、学校評価での教育活動への理解が十分図れていないことやホームページのリニューアルによる作業を１０月から行い、約４ヶ月間、ブログなどの情報が適時に発信することができないなど、運営や発信に対しての改善策が必要となってくる。

②ＣＳ委員会や「二小くまっ子応援団」との連携による「学びのプロセス」を重視した教育活動の展開が、５月のアフターコロナにおいて積極的に行われた。熊川分水や福祉体験、お囃子などやキャリア教育など、ゲストティーチャーが学校に積極的に来て、実際的な体験を伴う授業を展開することができた。